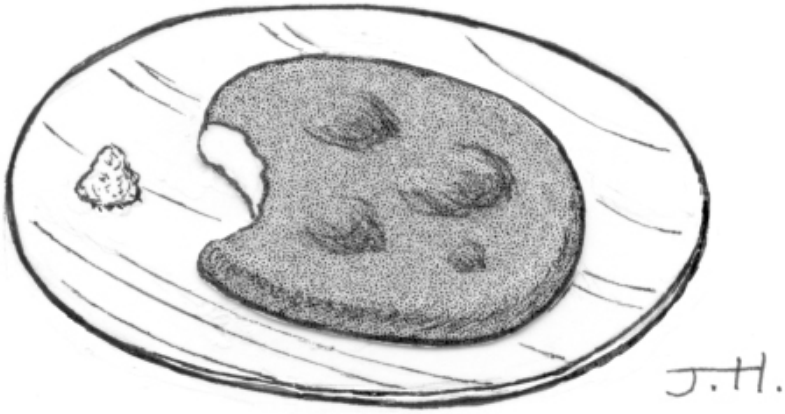
味の記憶

おやつでさつま揚げ

ノラ猫ミィちゃんのうた〜

―文学と食を愛するハイパー編集記者・ぼのぼ氏の、
わくわくエッセイコラム。
忘れられない子供時代の味の数々と共に、
昭和の悪ガキがよみがえる！



イラスト：服部淳子

●わが家のキナコ

わが家にメス猫のキナコがやってきたのは、東日本大震災のあった２０１１年の初秋。白毛を基調にうす茶毛の大きな斑点が背中４か所に点在し、耳と後ろ足の付け根、長い尻尾は、うす茶毛とこげ茶毛のまだら模様。いわゆる白三毛である。ふつうのノラに比べるとずいぶん小柄で、当時はやせ細り、白毛も薄汚れてごわごわに固まっていた。見るからに弱々しい印象だった。

三鷹市のわが家周辺には畑がまだ残っていて、林の公園も数か所あり、小川もある。エサを与える猫好きもいるのだろう。ノラ猫が生息する環境が整っていた。それだけにノラ猫の縄張り争いも熾烈。「この子猫ではシノギはとても無理ではないか」と思わせた。

実際、当初は近所を縄張りにしているキジとら親子３匹が、キナコを追い払おうとしていた。他にも大きな茶トラ、そして精悍な黒白猫と数え上げたらきりがない。そうした輩がわが家の玄関先や坪庭にしょっちゅう出入りしていた。先住者が猫を飼っていたというから、ノラ猫にもエサを与えていたのだろう。

そうした過酷な環境にもかかわらず、他の猫がいなくなると、キナコがどこからともなくやって来て玄関先や縁側にいつくようになった。その哀れを誘うような姿を見て私は思わずドラッグストアにキャットフードを買いに走った。期せずして嫁さんも同じことを考えたらしく、同じ日の仕事帰りにエサを飼ってきた。

いまの家に入居するときは「ネコはダメ」が条件。以前に飼っていた猫が屋内の柱や畳で爪とぎして相当傷んだらしく、それに懲りてのことだった。その条件を緩めようと不動産屋にずいぶん食いさがったが、とにかく「屋内はダメ」。それでも、「屋外なら……」ということで、何とか折り合いをつけた。

猫好きな嫁さんは段ボール箱を利用して、縁側にさっそくキナコ用の猫家を作った。アルミシートで覆った防水屋根に、箱の前後には出入り用の窓枠をつけ、サランラップでカバー。床にはモフモフのブランケットシートを敷いた、簡易ハウスだ。それを縁側にガムテープとナイロンひもで固定した。エサ皿には、以前に陶芸家の友人の処に行ったとき嫁さんが作った猫をモチーフにした平皿と、私作のぼこぼこ皿をしつらえた。

そうして縁側でエサやりをしていると、当然のことながら他のギャングノラが集まって来る。それにおびえてキナコがどこかに避難、ギャングノラがいなくなると、またやってくる、その繰り返し。キナコはメス猫だが、うちに来た時にはすでに避妊処置はされていたようで、オス猫に追い回されても迷惑なだけなのである。いつの間にか、わが家の庭先がノラの集会所状態になり、駐車場の車の屋根やトランク上が、ギャングたちの日なたぼっこ台になってしまった。

隣家は猫嫌いのようで、塀や車の上にペットボトルが置いてある。近所迷惑も甚だしいので、エサやりは家の中で行うことにした。リビングにエサ皿を置き、トイレもソファーの上にセットして、嫁さんが作った新たな段ボール猫家も室内に設けた。そこにキナコを誘導するようにしたのだ。そうなると、他のノラはさすがに敷居が高いのか、集会所状態は自然と解消した。

キナコも一時は屋内で寝起きしていたのだが、窓を閉め切り、私たちが２階に上がり放って置かれると、パニック状態になる。縁側と屋内とが出入り自由の状態でないと落ち着かず、なかなか半ノラ状態から抜け出せない。そんなわけで、いまは縁側の家で寝起きし、お腹がすいたら家の中の猫家（食堂）のエサ皿で食べ、ソファーの上のトイレを使うというサイクルで暮らしている。

ただ、出入りのサッシをずっと開けておくのは物騒だし、蚊や蛾も入ってくるので、一応サッシは閉め、縁側の

キナコが入りたそうにしたら、すぐに開けてやれるように、しょっちゅう見守っていなくてはならない。窓の開け閉め、エサと水やり、さらにトイレ掃除と、朝・昼・晩三度の世話は、もっぱら私がその係。嫁さんは嫁さんで、キナコと目が合うたびにブラシをかけさせられている。まさに下僕である。おまけにわが家のリビングはキナコのトイレと食堂になってしまった。どちらが飼われているのかわからない。人間と猫の主従が倒錯した関係に陥っているのだ。それでも下僕二人の奮闘の甲斐あって、いまではふかふかの白毛。脚の短いのも手伝って、まるでぬいぐるみのような容姿に変身している。

この関係はどこかで経験したような。そう、独身時代に部屋の中で放し飼いしていた3羽のインコの時と同じ関係なのである。個人の歴史もまさに繰り返す！　ということか。インコの話は涙なくしては語れない話だが、それはまた別の機会に。

●奔放のミイ丸

思えば幼少の頃、わが家ではオス猫のミイを飼っていた。知り合いの家から、生後しばらくしてもらわれてきた。その家で子猫がたくさん生まれたので方々の家におすそ分けした中の1匹で、避妊処置もなされていた。茶毛と白毛のまだら模様で茶毛が幾分勝っているトラ猫だが、よちよち歩きの可愛さったらなかった。オス猫なので成長するとともに、外へしょっちゅう出歩くようになった。わが家があった町の公務員住宅はみな農家の造りで、畑と庭の物置小屋つきの4戸が、防風林に囲まれた一区画に建ち並んでいた。垣根といっても申し訳程度、玄関、外縁側のどこからでも出入り自由で、裏手は林や小高い裏山。そんな環境だから、ミイが散歩する範囲はとても広くて自然に恵まれていた。

ミイはなかなかのハンターぶりで、ネズミはもちろん、トカゲやモグラ、私の嫌いなヘビだって捕獲する。野山にも自由に遠征し、アウトドア大好きな猫だった。ただ、困るのは、近所の家に上がり込んで、納戸の壁と箪笥の隙間にオシッコしたりすることだ。わが家でやっていることを、マユミの家やヒトミの家でもやってしまうのだ。縛りつけておくわけにもいかないから、これには閉口した。マユミの家ではエサをもらったりしていたが、ヒトミの家では庭の小屋で鶏を飼っているのでそうもいかない。ミイがヒヨコを狙おうとするのである。ついにはオバさんの堪忍袋の緒がキレて、ミイに毒盛のエサを与えて騒動になった。ミイはすぐに吐き出して事なきを得たが、その後遺症で、一時はゲエゲエ吐いたり目ヤニがすごかったりした。以来、ミイも鶏小屋には近づかなくなった。というか、おばさんが小屋のカギと柵を厳重にして、おいそれと近づけないようにしたのである。

天気が良いと、わが家では午前中は外縁側で布団干しする。その上でミイは気持ちよさそうにうたた寝。お腹がすくと、台所の土間に移動し、ニャアニャア鳴き出す。そこにエサ箱があり、削り節や煮干しをメインに残りの冷え飯やパン屑が盛られている。味噌汁をぶっかけ混ぜ合わせのこともあるが、それが空だと催促するのだ。当時はキャットフードなんてしゃれたものはなかった。土間でサンマやイワシを焼いていると、必ずちょっかいを出し、油断も隙もない。私の朝飯と昼飯には大抵うるめイワシやアジ、サンマの塩焼きが出ていたから、ミイは喜んでおすそ分けにありついていたが、猫にとっては塩分過多だったかもしれない。自分のハンターの腕を生かし、野山や畑の獲物を捕食。界隈では他の猫は見かけず、ミイの独壇場であった。

そんな様々なメニューの中でも大好物は、父が煮干しと味噌汁ぶっかけご飯をモグモグ噛み砕いた残飯だ。見るからに汚らしいのだが、それを残り余さずぺろりと食べた。父がめずらしく早く帰ると、足元にまつわりついて催促する。しかし、父の虫の居所が悪い

と、「うるさい」とひょいと抱えて裏庭の笹藪の方に放り投げられる。よくケガしないものだと思ったが、笹藪がクッション代わりになっていたのだ。ミイは怒られたことなどすぐに忘れて戻って来ては、またニャニャアと鳴く。ついには父も根負けしてエサをやるという具合だった。

私は子どものとき、猫とはそういうものだと思っていた。すなわち「自由でマイペース、そしてちょっとバカ」だと。しかし、いまメス猫のキナコを飼い、なかなか頭のいいナイーブな猫もいることを日々思い知らされている。

●ツヨシの訪問

そんなミイのことが大好きで、ウチに来る度かわいがってくれる者がいる。兄サダオの親友、ツヨシである。ツヨシは喧嘩っ早く、「狂犬」の異名をとるが、ノラ犬やノラ猫を見ると放って置けない優しい一面もあった。そのツヨシが、珍しく平日の昼近くにやってきた。ここしばらく学校は休んでいるらしい。当然のこと、兄サダオやシゲキにマサアキ、ヒロシ、姉マキコなどの年長組は皆学校で、この時間、近所にいるのは私とマユミとヒトミ、よちよち歩きのヒトミの弟・キュウタといった年下組のみ。持参した大きな紙袋には、さつま揚げと豚の干し肉のデンブ（細かく切り裂いてサキイカ状にしたもの）が入っていた。

私とミイは恒例の朝寝タイムで、縁側の干し布団の上でぐだぐだして、「今日は何して遊ぼうか」と思案している最中であった。

「食べるか」とツヨシが紙袋からさつま揚げを1枚取り出して私に差し出す。

「お前も食べるよな、おやつや」

持参したナプキン紙の上に盛り、ミイにも分け与える。

このさつま揚げが格別においしいのだ。我々の間ではおやつの王様であった。ここらあたりは漁港が近いので割安とはいうものの、当時で1枚30円くらいはしたと思う。私の小遣い5円ではとても手が出ない。ツヨシの家はお金持ちで小遣いもいっぱいもらっていたから、さつま揚げをよく買っていたのだ。しかも魚屋の常連なので、成型でしくじった半端ものを大量に百円くらいで手に入れていた。だが、そのほとんどは、自分が食べるのではなく、ノラ犬やノラ猫にエサ用としてくれてやるのだ。ことのほか動物好きなツヨシならではの行いである。

私もミイも、揚げたてで熱々の香ばしいさつま揚げにありつき大喜び。午後のおやつタイムの前にこんな高級おやつにありつけるとは、口福！　の一語。

少し話が横道にそれるが、さつま揚げの材料は、地元で多く獲れるイワシやサメ、カツオ、サバ、ホッケなどの魚すり身。それを塩・砂糖などで味付けし、成型して油で揚げるのだ。ジャコやイカ、タコ、エビなどを混ぜた物や、野菜入りの、値段が少し高めの物もある。また、宮崎では「おび天」といって、トビウオやアジのすり身に豆腐や黒砂糖、味噌を混ぜて揚げた物があり、魚と豆腐の柔らかな舌触りと甘さが特徴の高級品だが、これは飫肥すなわち日南地方の名産品だ。

私も時々スーパーでタラやイワシ、アジのすり身を買ってきてさつま揚げを作ったりするが、やはり市販のもののようにはいかない。だが、揚げたては結構いける。ビールの肴には最高だ。

ともあれ、この時私たちが食べたのは魚すり身だけのいたってシンプルな物。大きな1枚をペロリと平らげた後、ツヨシに訊いた。

「どうしたと？　こんな早い時間に」

「うん、まあちょっといろいろあって、しばらく学校は休んじょっと」

ツヨシの家は隣町で会計事務所を開いている。上に3人の姉と、姉マキコの同級生である妹ケイコがいる。女性陣は皆優秀で成績もトップクラス。一方、跡継ぎ候補の一人息子ツヨシは、成績がびりから数えた方が早い。教育

熱心な家なので、いつも親からは「もっと真剣に勉強しろ」と口やかましく説教され、そんな家が息苦しいのか、遠路、我が家に遊びにやって来るのだ。

今回は、学校の宿題を提出していないことを意地悪な担任から親に報告され、さんざん怒られたようだ。おまけに喧嘩っ早くて、気に入らないと年上でも構わず突っかかっていく。最近は最上級生の番長に睨まれていて、学校に行くと事あるごとに喧嘩になる。ツヨシは劣勢でも際限なく向かっていくので「狂犬」と綽名が付いている。そのことも担任に睨まれる一因になっていた。その一部始終が親に報告されたのだ。親は激怒してツヨシの言い分を一切聞こうとしない。おかげですっかり嫌気がさして、家にいるのもやり切れず、かといって、学校に行く気もしない。とまあ、ツヨシは最近の身辺事情を私にぼやいてみせた。

しかし、ツヨシは見かけは乱暴だが、ちょっとしたことで傷つきやすい。そのことを我々遊び仲間はよく知っているのだ。

「話はこれくらいにして、エサやりに行かんね」

ツヨシはそう言いかけて、ふと私の後ろを見た。いつのまにか、すぐそばにマユミが経っている。我々二人の秘密話が聞こえるくらいまで近づいて、さつま揚げの入った袋を、よだれを垂らさんばかりに、じぃっと見つめているのだ。

「おっ、マユミも食べるか?」

「うん」

ツヨシが袋からさつま揚げを1枚取り出して差し出すと、ひったくるように取って、いきなりむしゃむしゃと食べだした。

「おいしい〜」

虫歯だらけの歯をむき出しにして、にんまり笑うマユミ。念願がかなって本当にうれしそうだ。

ツヨシはそのマユミの笑顔を見て、心のモヤモヤが少し晴れたのか、私の方を振り向いて、

「どうや、エサやり行かんか」と改めて誘いをかけてきた。

「うん、行こう」と答える私。

「私も行く〜」

マユミが、口をモグモグさせながら言った。彼女に話を聞かれたらが最後、言い出したら聞かない。しょうがないので、

「だったらカアちゃんに断ってきな」

と、ツヨシが分別くさくマユミに言い聞かせた。

「うん、ちょっと待ってて」

マユミはわが家の向かいにある自宅へと駆けだしていき、おばさんに報告すると、すぐに取って返してきた。おばさんは放任主義というか、野生のブッラシー・マユミについては放し飼いで、ケガさえしなければよいのである。よく知ってる年長者が同行するなら、任せておけばよいという態度だった。

「じゃあ、今日はエサやり探検じゃ」と私が宣言すると、

「エイエイオー」と拳を揚げてマユミが応える。

「それでは、出発〜」とツヨシが掛け声を放った。

●ツヨシのエサやり行脚

ツヨシのエサやりポイントはたくさんあるが、今日は幼いマユミも同行するので、その中から飛び切りの代表ポイントを選んだようだ。

一つはノラ猫がたくさん集まるお地蔵さん街道の祠前。ホタルとりの貯水池沿いの小道を通り抜けて、地蔵街道とぶつかった地点だ。祠のある広い空き地に草が茫々と生えていて、ノラ猫のたまり場になっている。祠に安置された地蔵にはいつも誰かがお供えをしている。ついでに猫好きの人がノラ猫用のエサも置いていくので、それを目当てにノラ猫が集まってくるのだ。ツヨシはそこをめざした。

わが家からは徒歩20分ほどだが、マユミも一緒なので、道中は飛び交うトンボを追いかけたり、あぜ道の草花に集う蝶を眺めるなど道草をしながら、倍の時間をかけてようやく辿り着い

た。

「ほら、猫がいっぱいいるやろ。あの黒白が太吉、こちらの三毛がタイ子……」

ツヨシが呼ぶと、一斉にツヨシの周りに集まってきた。ツヨシはそこに集まるノラ猫に名前をつけていた。その一匹一匹に袋からさつま揚げを取り出して、小さくちぎって分け与えた。食べている猫の背中を撫でる姿は、いつもの仏頂面とは違って、本当に優しい表情をしている。私もマユミもそんなツヨシの顔は見たことがないので、ただぽかんと口を開けて見ていると、

「何しちょっと、二人も撫でてやれ」とツヨシが強く促す。

私とマユミが恐る恐るノラ猫の背を撫でようと手を伸ばすと、猫たちはびくっとして逃げ去ってしまった。

「しょんなか〜」とつぶやき、ツヨシが猫を呼び戻して、またエサを与える。一通りノラ猫たちにエサを与え終わると、ツヨシは3枚残ったさつま揚げを1枚ずつ分けてくれ、みんなで食べた。ノラ猫が食べているのをマユミが羨ましそうに見ていたからだ。

「じゃあ、次のエサ場に移ろう、すぐそこやから」と、ツヨシが号令をかけた。

もう一つエサやりポイントは、地蔵街道をそこから5分ほど北上した、廃寺の境内跡地である。木立に囲まれた朽ちた社殿の下に、柴犬の雑種の母犬と子犬3匹の親子が住み着いていた。当時はまだあちこちにノラ犬がいたが、見つかると保健所に通報され捕獲されるので、ノラ犬の方も警戒して隠れひそんでいた。

ツヨシは持参したもう一つのごちそう、デンブ（豚の干し肉）を社殿下の縁石の上にのせて縁の下をうかがう。そして、

「ラッシー、メシやぞ、みんな出てこい」と呼んだ。

マユミと私はいぶかしげに顔を見合わせた。〈ラッシー？……〉

当時はテレビ番組「名犬ラッシー」が話題を呼んでいた。その名をツヨシはノラ犬に付けていたのだ。テレビの方はコリー犬だが、尻尾を振り鼻をクンクン鳴らしながら出てきたのは、柴の雑種のノラ犬親子であった。

「この母犬がラッシーじゃ。何がおかしいと」とツヨシが怒ったように言う。

名に恥じぬ名犬かどうかはともかく、ノラ犬親子は愛嬌があってかわいかった。縁石の上のデンブを一心不乱に食べている。以前、わが家で大騒ぎになったあの恐ろしいシェパード犬とは大違いである。

ツヨシが母犬ラッシーの背中を撫でてやると、ラッシーはツヨシの口の周りをペロペロなめてくる。すっかりなついているようである。子犬たちはその周りでじゃれあっている。その光景が何ともほほえましく、傍で見ている私とマユミにも、〈ツヨシの動物好きは本物じゃ〉と、はっきりと分かった。

ちなみに、ツヨシの家には大型犬と猫が3匹、小鳥のジュウシマツがいて、その上、二つの大きな水槽に、それぞれ金魚と子亀を入れて飼っている。とにかく、ツヨシは動物大好き少年なのである。

●引っ越しでミイが行方不明に

それから1年ちょっとして、わが家は父の赴任により、九州山地の奥深い田舎に引っ越すことになった。その引っ越し準備を終えていざ出発という間際に、ミイが突然いなくなったのだ。皆でさんざん探したが見つからず、出発の時間も迫り、なくなく置き去りにした。ミイも一緒に引っ越すつもりでいた家族はすっかりお通夜状態になったのを覚えている。猫は家に居つくというが、残念ながらその通りになってしまったのだ。

引っ越し先に着いても我々きょうだいが考えるのはミイのことばかり。それからしばらくして、兄にツヨシから手紙が届いた。

「ミイはオレが面倒を見ている、心配すんな」と書いてあった。

ミイは広瀬の家の縁の下を住処にして、気楽に暮らしているという。エサについては、ツヨシが面倒を見ているらしい。ツヨシのエサやりポイントがまた一つ増えたのだ。

それを聞いて、家族は心底ほっとした。

やがて、ミイは、ツヨシの家で飼われるようになったが、死ぬときは自分が育った広瀬の家の縁の下に戻ったそうだ。もちろん埋葬はツヨシがしてくれた。

その後、ツヨシは獣医大に進み広瀬で動物病院を開いている、と兄から聞いた。あれだけ動物思いの優しい獣医師なら、動物も幸せというものである。